

法然上人讃仰会

2010

monthly
JŌDO

6
June



小さな家

ここは小さな家 でも大きい
 この小さな家には 大きな愛がある
 ぬくもりがある 喜びがある
 ばあちゃんと母さんの親子愛がある
 この小さな家には 辛さがある
 悲しみがある 葛藤がある 寂しさがある
 この小さな家には いぶき(息)がある
 ばあちゃんの強く生きようとする意志がある
 この小さな家には 大きないろいろなものが
 はちきれんばかりにつまっている

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
 宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
 『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
 筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

6月の書

光明無量

仏の光は計り知れない

釈尊は舍利弗に尋ねています。
 「その仏さまはなぜ阿弥陀という名前なのか」と。

その答えの一つがこの言葉です。
 「阿弥陀」とはサンスクリット語「アミターバ」(無量光)の音写文字なのです。

その仏さまの放たれる慈悲の光(光明)は限りがなく、そして十方の世界を照らしているから、と続きます。(編集部)

浄土

2010/6月号 目次

仏教とAED	森 俊英	2
会いたい人 桂米團治さん②	関 容子	14
連載小説 渡辺海旭 (15)	前田和男	22
響流十方	林田康順	30
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	34
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ、さっちゃんねッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
表② 茜の詩	新納 茜	
表③ 教えと法話	生野善應	

表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



仏教と

A E D

AEDは2004年から一般市民の使用が可能となった。
学校・駅・空港などの公共施設、そして寺院にも設置が進んでいる。
心臓に電気ショックを与えるAED、いざというとき、あなたは使えますか。

大阪正明寺副住職
総本山知恩院布教師
LSFA（応急手当）インストラクター
現在、大阪刑務所で教諭師・篤志面接委員として、
仮釈放前の被収容者にAED使用法の講習を務める。

**森
俊英**

I 電気ショック

1 使いまちがったら？

昨年3月に開かれた東京マラソンで、ランナーとして参加していたタレントの松村邦洋さん(41)が、走行中に急性心筋梗塞で倒れた。呼吸・心臓の拍動が止まっていた。しかし、ただちにAEDが使われ、蘇生が成功しこの世に復帰をはたした。

このニュースに、私の友人Y君は、「よかった、すごい機械だ。でも僕には使えないなあ、こわくて」と。

Y君が言うには、こうである。

AEDは、止まっている心臓に電気ショックを与えて、その衝撃によって再び心臓を動かすようだ。ただし、使いまちがって動いている心臓に電気ショックを与えたら、逆に止めてしまうかもしれない

い。僕のような医者でもない素人は、使うことを躊躇する。

さて、Y君のAEDに関するこうした受け止めは、妥当なのであるか？

2 AEDの機能

「名は体をあらわす」という。最初に、その「AED」という名前をひも解いてみよう。Automated External Defibrillator 頭文字をとってAED、日本語訳は「自動体外式除細動器」である。なんだか難しく感じるが、注目すべきは最後の「除細動」ということばである。

私たちの心臓が心筋梗塞などによって拍動が止まったとき、しばらくの間、小刻みに震えた(けいれん)状態になる。これを「心室細動」という。放置しておけば数分で静止状態、つまりけいれんも無くなる。ところが、このけいれん状態のときに電気ショックを与

AED の操作方法

- 1 電源を入れる
- 2 音声指示が始まる
- 3 電極パッドを患者の胸に2カ所はる
(場所は機器にイラストで示されている)
- 4 機器が電気ショックの必要があるかどうかを解析する
- 5 必要ありの場合は音声流れる
- 6 電流が流れ危険なので、周りの人を患者から離して
除細動ボタンを押す



図1

えると、けいれんが除かれ心臓が再び正常な拍動を取り戻す、すなわち蘇るということ。
AEDは、この「細動」を電気ショックによって「除く」機械であるから「除細動器」と名づけられている。前述のY君は、止まっている心臓に電気ショックを与え、その衝撃で心臓を動かせる、と解釈していたようだが、それは誤解なのである。

それからもうひとつ、AEDのAは訳すと

「自動」である。AEDの操作は図1の通りで、最初に電極パッドを患者の胸に2ヶ所はる。そうするとAEDは、患者の心臓の状態を調べるのである。そして必要な状態のときのみ電気ショックを発する。つまり、正常な心拍、もしくはすでに静止しているか、それに近い状態のときは電気を発しない。この判断を「自動」でやってくれるすぐれものがAEDである。

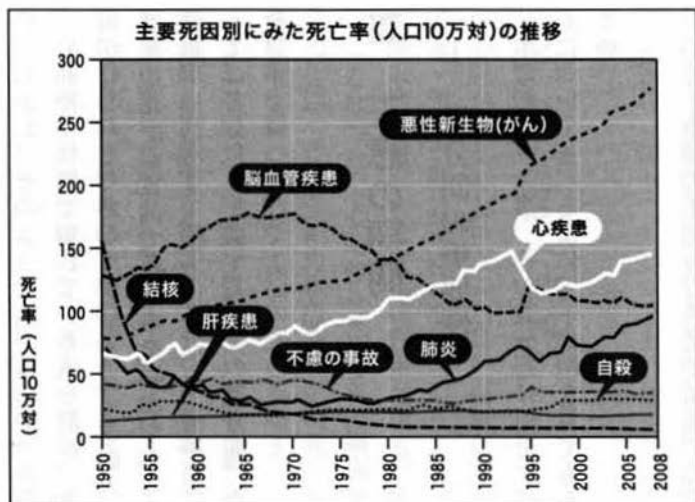
だから、Y君の言う「使いまちがい」は、起こらないように作られているのである。

II 他人ごとではない

1 死因の2位

心臓の病気による死亡率は、1985年に脳血管の病気を抜き、がん死に次いで第2位になった。そして仕事やスポーツ、あるいは日常生活中に突然発生する心臓発作による心

停止は、年間2万〜3万件に及ぶと推測されている。決して、私の周辺では起こりえない、などとは言えない状況である。



(資料 厚生労働省「人口動態統計」なお2008年は概数)

図2

2 寺院の本堂で

心筋梗塞などによる心停止が、寺院で起こるかもしれない。

たとえば、

本堂で老若男女が法話を聴いている。突然、聴衆の1人である60才代の男性が胸に手を当てながら前に倒れこんでしまった。周りの聴衆が、その倒れた人を心配そうに囲んでいる。前に立ち、法話をしていた布教師もその状況に気づき、話すのを止めた。

さて、この状況でまず確認すべきは、倒れた人に反応があるかどうかである。反応があり、会話ができる状態なら対処も行い易いが、反応がなく呼吸も確認できないようなら一大事である。聴衆の中に、医療関係者が居れば有難い。その人の指示と手当てに任せればよ

い。しかし、そのような人が居なかったら：心肺停止状態で倒れている人を前に、次に何が行われるであろうか。おそらく寺の人か、聴衆の誰かが電話で救急車を呼ぶであろう。救急車は到着まで約6〜7分、交通事情によつては8分以上を要する。その数分間、ただ救急車を待つだけでよいのだろうか？

Ⅲ 天恵の期間

1 数分間の重要性

本堂での一大事、その数分間に何をすべきかについて述べる前に、下の図を見てもらいたい。

心停止直後の小刻みな波動が前述の心室細動であるが、数分後には静止状態へと移行している（図の上段）。その細動に、AEDが電気ショックを与えるのである。ただし、心

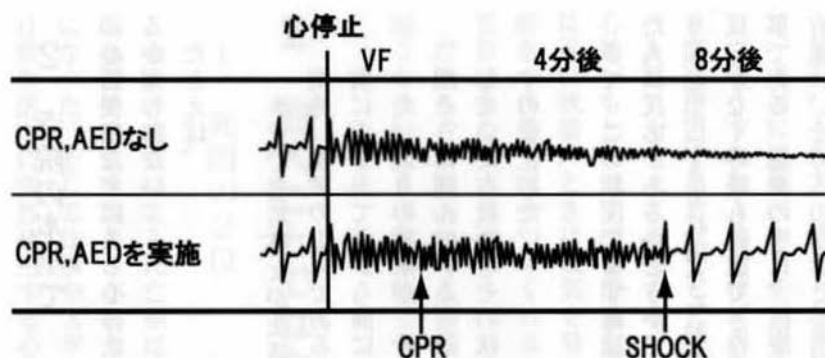


図3 CPRと除細動による効果（イメージ）
13頁に記載の参考文献Ⅰからの転写

停止後1分経つごとに除細動の成功率は、7〜10%下がるといふ。心室細動は、僅かな時間の現象と考えねばならない。心停止状態においては、救急車が到着するまでの数分間が、実は復活（蘇生）へのカギをにぎっているのである。

2 神が与えた時間

心臓が止まるということは、血液によって酸素・栄養が脳に運ばれないということ。心肺停止後、何もしなければ脳死となる。医学のことばでは、心肺停止状態を「臨床死」、脳死を伴った完全死の状態を「生物死」となっている。

ところで、「死」の定義はたいへん難しい。臓器移植に関する議論がそれを物語っている。当稿も「死」の定義付けが目的ではない。ここで言いたいのは、次のことである。

心肺停止から全脳死までのあいだを、医学のことばは、The Grace Period 「天恵の

期間」と名付けているということ。キリスト教的には、「神が与えた時間」とも言えるであろう。

難しいことばが続いたので、図で整理してみよう。



図4

Ⅳ 心肺蘇生（CPR）

1 CPRとAED

AEDの機能と心臓のメカニズムを正しく知るならば、私たちは、いざというときAEDを積極的に使うべきであることを、ここまですべて述べてきた。

そして、さらに重要なことがある。それは心肺蘇生（えんばいそせい英語ではCPR）である。

6頁の図3をあらためて見てもらいたい。下段に「↑SHOCK」とあるのは、AEDによる電気ショックであり、「↑CPR」とあるのが、心肺蘇生を施していることを表している。

人間の脳は、それ自体に酸素を蓄える能力がなく、絶えず酸素を供給し続ける必要がある。だからこそ、心肺停止状態になったらだちに、脳が死滅しないようにこのCPRに



胸骨圧迫（心マッサージ）

患者の胸のまん中を圧迫する。
患者の胸が4～5cm沈み込む程度を30回。



人工呼吸（マウス トゥー マウス）

患者の鼻をつまみ、1秒かけて2回吹き入れる。
人工呼吸2回・胸骨圧迫30回、
その繰り返しが心肺蘇生（CPR）

☆これらの練習は必ず人形で行うこと！

注 CPRとはCardio-pulmonary Resuscitationの略。
「Resuscitation」は蘇生、即ち生を蘇らせる（取り戻す）という用語。

よって、酸素を送り込むことが大切なのである。CPRすなわち人工呼吸・胸骨圧迫の開始が1秒でも早いほど、蘇生率および社会復帰率は高くなる。逆に言えば、心肺停止後の数分間に何もしなければ、その人の脳は死滅するということ（脳は二度と蘇らない）。

図3を再度よく見ていただきたい。上段に比べて、CPRを施している下段のほうが、心室細動が長く維持されているのが示されている。CPRは脳の死滅を遅らせ、しかも心室細動の延長に効果があるわけである。

いざというとき、その周辺にAEDがあるとは限らない。119番と同時に、より近くにあるAEDを探し、急いでそこへ運んでくべきは言うまでもない。そのAEDが来るまでの間、「時間を稼ぐ」という絶大な効用がCPRにある。

2 ファースト・エイド

救急隊が来るまでに、一般市民が行うもの

を応急手当（ファースト・エイド）と呼ぶ。前述のCPR・AEDは、そのファースト・エイドにおいて大いに重要視されるものである。私はファースト・エイドを、専門家である伊東和雄先生に学んだ。当稿で述べてきた内容も、すべて伊東先生からの教授である。

ファースト・エイドの普及は、消防署・赤十字社などが尽力されているが、民間において、その普及を職業としている人たちもいる。伊東先生もそのひとりで、年間1,000人を超える人々への講習を務め、さらには早稲田大学の講師として、学生にファースト・エイドを教授している。学生からの人気は非常に高い。

3 正しい理解と実技の徹底

CPRの手順は先述の通りで、人工呼吸2回・胸骨圧迫30回、その繰り返しで世界基準（注）に沿ったものである。だから指導者によって内容が変わるものではない。伊東先生

注 世界基準とはILCOR（国際蘇生法委員会）2005によるコンセンサス（合意）。これは5年に1度改正され、現在は新しいコンセンサス（CoSTR 2010）の発表を待つところである。

の講習が多くの人々に評価されているのは、
どういう理由なのか。それは、研究と経験の
積み重ねによる指導方法にある。

・救急医学の専門医から学ばれている最新
情報・知識を、受講者に分かり易く説明
・そのうえで実技の徹底

「実技の徹底」と言うと、きびしさを想像さ
れるかもしれないが、決してそうではない。



講習に用意される機材（12名の受講者に対して）

伊東和雄先生および各先生による応急手当の講習
会（AED・CPRなど）については、筆者のホーム
ページ（<http://homepage3.nifty.com/sho-myō-ji/>）をご参照ください。

多くの人形とAEDが用意され、一度の受講
人数も限定して行われる。そして丁寧な直接
指導で、とても優しいのである。

伊東先生はこう語られる。

“応急手当の指導成果は「伝えたか」ではな
く、「受講者が実際の場面で実施出来るか」
に焦点がある”

そうした方針と長年の研鑽により、現在の
指導方法へと辿りつかれたのである。

V 「慈悲」の実践

1 他者のため

私は、CPR・AEDの講習に参加しその
光景を眺めていると、つくづく感じるものが
ある。受講者が人形を相手に、息を吹き込み
胸を押す姿は、とても美しい。なぜ、そのよ

うに感じるのだろうか。

CPRやAEDは自分に対して効用できない。考えれば当然だが、心筋梗塞などによって心停止がわが身に起こったなら、まもなく呼吸も止まり意識もない。自分を蘇生させることなどできない。そうすると、CPR・AEDは他者を蘇生させるためにある、という見方もできるであろう。

前節で紹介した伊東先生は、応急手当の普及に尽力されるなかで、次のような信念を語られる。

「受講した人が、いざというときに手当てを実施できることを切に願う。しかし、人によってはそのような場面に、生涯出合わないという可能性もある。だからと言って、学んだことは無駄ではない。応急手当を学ぶことは、事故防止を考える力を養うとともに、その人の人生観にきつと良いものを与えることと信じている」

応急手当、特に命に大きく関わるCPR・AEDの習得は、ある意味で「人間教育」であり、仏教的にも「心の修養」につながるものと思えるのである。

2 家族や友人を想って

「他者のため」と言うのと抽象的だが、家族や親しい友人の「いざというとき」を考え、より身近な感覚で、ここまで述べてきたことを読みとってもらえるであろう。

読売新聞（神戸版・08年6月13日）に次のような記事があった。

【119番で蘇生法 夫を救助】という見出しで、リードは「神戸市消防局が妻指導・後遺症なく復帰へ」とある。

本文によると、早朝、夫（34）の心停止に気付いた妻が119番。妻は心肺蘇生の練習などをしたことがなかったが、消防局の電話指示で心肺蘇生、つまりCPRを繰り返した。そして、到着した救急隊員がAEDを使い心

拍再開、夫は4日後に意識を取り戻した。記者会見で妻は「自分しかいないと必死でした」と、語ったことが報じられている。

この記事に学ぶことは多い。

① 電話による指導

このように119番の指令室において、応急手当の口頭指導が行われるようになってきた。これは救助者にとって、たいへん有難いことである。手当ての実行に躊躇した場合などには心強い味方である。

② AEDが無くとも

今、あなたの周りを見回していただきたい。自宅なら、近所の建物も含みAEDが身近に存在するかどうかを。たとえ隣が学校であっても、夜間ならAEDの借用はまず無理である。しかし、救急車にはAEDが搭載されている。それまでのあいだ、CPRを実施

しておくことがいかに重要であるか、という事実が示されている。

私たちも、いつ、このような事態に遭遇するかわからない。身近な人の「いざというとき」を想い、応急手当の習得に関心を高めたい。そして、見知らぬ他人のときにも、その人の家族の気持ちになって、手当ての実施ができるよう心がけたいものである。



3 宗教者は人々に先んじて

当稿の序盤で、「寺院の本堂で…」という問題提起をした。もう、読者各氏にその答えは不要と思われるが、最後に僧侶の立場から理想形のひとつを述べて、稿の結びとさせていただきます。

《本堂で、聴衆のひとりが胸を押さえて前に倒れこんだ…》

- ① それに気づいた布教師（法話の僧侶）が、その人に近づき反応の有無を確認。
- ② 反応が無ければ、救急車（119番）を頼み、住職にAEDを依頼。
- ③ さらに呼吸が無いことを確認したら、すばやくCPRを開始。
- ④ 住職が玄関に設置していたAEDを、その人の頭の横に置いて操作開始。
- ⑤ 救急車が到着し救急隊員に引き継ぐま

で、CPR・AED操作を続ける。

なお、AEDのパッドは、傷病者の上半身を裸にして素肌へ直接はらねばならない。もし、傷病者が女性であればCPR・AEDの実施も、出来る限り女性による手当てが良い（その場に女性がいないければ、もちろん男性が手当てを施すべきである）。そうしたことを考えると、住職のみならず、寺院の奥さん・娘さんたちも、積極的に応急手当に関心を持たれることが望まれるのである。

なぜならば、世間の人々に先んじて、「命の大切さ」を説き実践していくことは、宗教者・仏教寺院の大きな役目だからである。

合掌

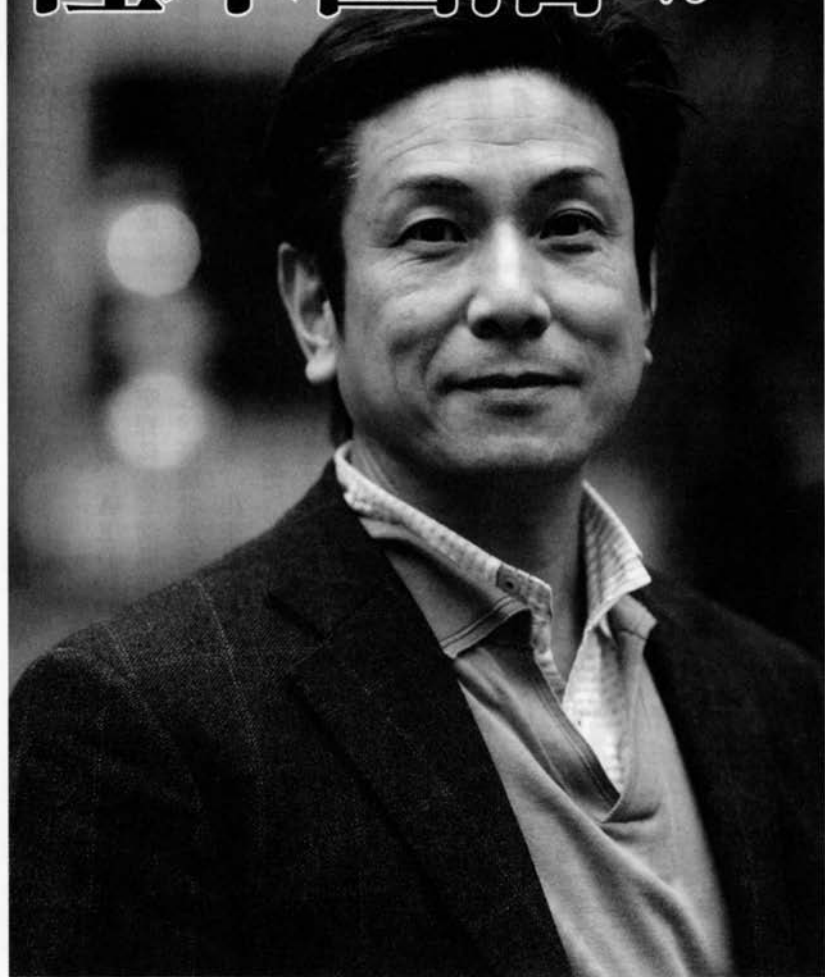
【参考文献】

- I 「緊急時の応急手当てと事故防止」第4版・著者 吉田一心、伊東和雄・医学監修
- II 荻野隆光（川崎医科大学救急医学准教授）、石松伸一（聖路加国際病院救命救急センター長）・発行（有）マスターワークス・2007年1月
- III 「このもの事故と応急手当て」第4版 著者など右と同じ「プロフェッショナル・インストラクター」第2版・著者 伊東和雄・発行（有）マスターワークス・2004年11月

連載

会いたい人
関 容子

桂米團治さん②



撮影／タカオカ邦彦

米團治さんには、多方面にわたる天分があつて、嘶家になる決心をする前にいろんな選択肢があつて迷つたらしい。

まず絵画は個展を開くほどの腕前で、家庭で孫とくつろぐ父の米朝師匠を描いた油絵などは堂に入つたものだった。

「小学六年のときから絵筆を持つてました。絵の先生から、将来は美術大学へ行きなさいよ、と言われたりもしましてね。ほかにもお習字に算盤、ピアノ、狂言、日本舞踊といろんな稽古ことをあてがわれてまして」

米團治さんの母はOSK（大阪松竹少女歌劇）出身で、先輩に女優の京マチ子や歌手の笠置シズ子などがいたという。

「母は若柳流の名取で、うちの一门は素養の一つとしてみんな母から踊りを習うんです。それでぼくにもついでに教えてくれてました。ぼくは小学生のころ小児喘息の持病があつたので、母が心配してサッカースクールの『スポーツ少年団』へ入れたんです。最初の

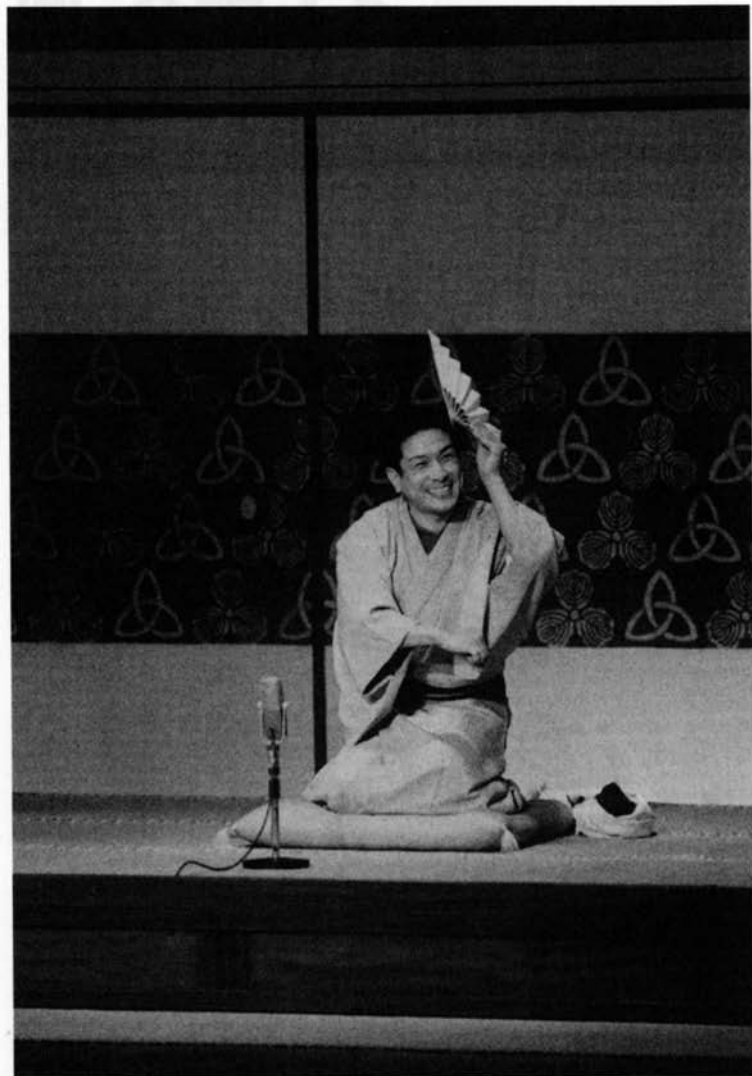
うちは別になんとなく、という感じでしただ、中学に入ってからはずつかり夢中になつて、ぼくは『サッカー少年』になつたんですね。高校二年のとき、そのスポーツ少年団のリーダーとしてドイツにホームステイすることになったんですが、この一か月の旅で、ぼくは大好きなドイツ語とモーツアルトに出会つて、それが人生の大きな財産になるわけなんです」

努力家の明少年はホームステイが決まつた約三か月前から、NHKラジオの「ドイツ語講座」を聴いて準備勉強を始めた。

「外国語はとにかく暗記ですね。一日に文章を一つずつ丸暗記しました。十代に憶えたこととして、今も忘れないものですね。ドイツから帰国したらすつかりドイツかぶれになつてまして、将来はドイツ語の通訳になろうと、一時期本気で思つてました」

ドイツかぶれと言えば、東京の嘶家代表に故・志ん朝さんがいる。独協高校卒でドイツ

会いたい人

1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025

東京歌舞伎座で「七段目」を熟演する米岡治さん(平成8月11月26日)。撮影／宮崎金次郎

びいきだったことから、後輩から「ドイツの兄さん」と呼ばれていた。

「そうそう。ぼくが嘶家になつてから、NHKテレビの『ドイツ語会話』の生徒役で二年間出演していたのを御存知の師匠が、楽屋でドイツ語の挨拶をなさるんですよ。『ハッイ、コバイチヨウ、ヴィーゲートエスイーネン（元氣ですか）』するとぼくが『エスゲートミアグート（元氣です）』なんてね。内心、どや、わからへんやろ、という気分であたりを見回したりなんかして（笑）」

モーツアルトとの出会いは、ホームステイの最後のほうで抜け出して、ザルツブルクへ一人旅をしたことによる。

「幼稚園のころ、すぐ御近所に住んでた親日家のピアニスト、エルンスト・ザイラーさんは、オーストリアのザルツブルク生まれで、奥様は日本人でした。女の子が四人いて、長女のユリちゃんがぼくの同級生。ひどい弱虫

だったぼくは親の顔が見えなくなるとすぐ泣きじゃくる（笑）。幼稚園一の泣き虫だったんです。ユリちゃんがあきれて、『どうして明君、泣くんでしょうねえ』なんてしげしげ眺めてたのを覚えてます。ぼくらが小学生くらいとき、御一家がザルツブルクに戻られてそこで離婚して、ザイラーさんだけがまた来日して別の日本人女性と結婚して、そこに女の子が二人生まれたんですけど、前の奥様と四人の娘は向うに残されたんです。母とその先妻さんとはずっと文通してて、今度うちの明がドイツへ行くのよ、と知らせたら、ザルブルクはすぐ隣りだから是非お寄りなさいよ、と返事が来しました」

ホームステイの行く先は北ドイツのニーダーザクセン州。そこからザルツブルクへの少年の一人旅は大冒険だった。

「団長さんにわけを話して、自分の全責任で行くならいいよ、と暗黙の了解をもらいました。空港までタクシーで行って、それからザ

ルツブルクの空港でザイラーさん一家に会った瞬間、ヘナヘナヘナと全身の力が抜けていくのがわかりましたね（笑）。明ちゃん、よく来たねえ、と歓迎されて、まずザルツカンマーグートの美しい風景にしばれました。つい先ごろ学校から観に行ったばかりの映画『サウンド・オブ・ミュージック』の世界そのままじゃないですか。北ドイツはいつもどんより曇って寒風吹きすさぶ土地ですが、こっちは緑の牧草繁って、空も澄み渡って明るいです。きれいなとこやなあ、と、十六歳の少年はまず景色に圧倒されましたね」

しかし衝撃的だったのはそのあと、モーツアルトの生家を訪ねたときだった。初めて来たところなのになぜか「なつかしい」感じがしたという。世に言う既視感^{デジャヴ}というものか。

「中学生のころからクラシックのレコードはよく聴いてましたが、ぼくが最初に買ったのがモーツアルトの40番41番、『フィガロの結

婚』と『魔笛』の序曲。チャイコフスキーの『白鳥の湖』と『胡桃割り人形』の抜粋、という二枚組のLPだったんです。チャイコフスキーのほうは非常にわかりやすいけど、モーツアルトのほうはちよつとわかりにくいかな、と思って聴いてた程度でした。それがザルツブルクのモーツアルトの、あの黄色い建物に入った途端、前にもここに来たことがあるような気がして、なんだかモーツアルトに呼ばれたような気になってね（笑）。そのあとすぐにその近くのレコード屋に行つて、A面はトルコ行進曲が第三楽章に入ってるピアノソナタ11番、B面はピアノコンチェルト27番、というのを買いしました。このコンチェルトはモーツアルトが亡くなる年に作曲したもので、あの若さでもう人生を達観してるみたいな感じがあつて、日本へ帰つてつくづく聴いてみたら、こんな曲があつたんかあ、と心に沁みましたね」

明少年が『トルコマーチ』の入ったレコ―

ドをまっ先に手に取ったのにはわけがあった。

「はい、初恋の女性は高校の同級生ですけど、ピアノが上手で、音楽の時間にその子の伴奏で合唱したり、縦笛を吹いたりして、かっこいいなあ、と憧れてました。ぼくは幼稚園のころにアップライトのピアノを買ってもらって、二年ほど稽古に通って、辞めるといって、よくあるパターンでしたけど、高校生になって、あの子みたいに弾きたいなあ、と思って楽譜を買いに行って、『トルコマーチ』は音譜が結構少なそうだからぼくにもいけるかと思って練習してましたからね。それで迷わずにそのレコードを買ったわけです」

帰国して明少年はモーツアルトのレコードをどんどん集め出した。その後間もなく封切られた映画『アマデウス』を観た瞬間、たまたま衝撃が走る。

「カルチャーショックを通り越して、啓示を

受けたんですね。ぼくはモーツアルトの生まれ変わりや、って（笑）。親たちは正岡容先生の生まれ変りと思ったそうですが、ぼくは独自にモーツアルトと思い込むわけです。ベートーヴェンのな生き方もとても好きですし、彼の音楽は人間的な感じがして、努力すればもしかして追いつけるかも知れない、と思わせるところがありますけど、モーツアルトの音楽は宇宙的で壮大で、透明感に溢れてて、永遠性を感じさせますよね。寂しいかと言えばそうでもない。楽しいかと言えばそうでもない。その間で、無限に広がってゆくようで、まさに神の領域ですから、滅多に近寄れるものではない。じゃあいつそ『モーツアルトの生まれ変り』をぼくのキャッチフレーズにしてみまえ、ということになったんです」

嘶家になって十三年目の一九九一年はモーツアルト没後二百年で、それに因むさまざまな催しがあったが、当時の小米朝さんが作・演出・主演した『かげき・モーツアルト』は

モーツアルトに扮してオーケストラを指揮。「モーツアルト室内管弦楽団
第88回定期演奏会」(平成10年12月)。「小米朝」より。



ずいぶん評判になった。

「題名の通り、過激な歌劇でした(笑)。京都
都会館で上演しましたが、成安女子短大の被
服科の学生さんが、ロココの衣裳を作ってく
ださって、これはそのあとも重宝しています。
モーツアルトの扮装をして、モーツアルト室
内管弦楽団の指揮をしたりとか、モーツアル
ト関連の仕事をたくさんいただくようになり
ましたから。柳家花緑さんとは境遇がとても

似ているのでよく共演します。彼のお祖父ちゃん、五代目小さん師匠も、うちの父米朝も落語界では二人だけの人間国宝である、という点とか、音楽が好き、という点とか。花緑さんはピアノがうまいですよ。しかし楽譜が読めて練習に怠りない彼と、楽譜もろくろく読めずにその場しのぎで弾くぼくなんです。でもぼくのほうがうまいことがあって（笑）、『二人のモーツアルト』という会で、前半が落語、後半がピアノコンサートのように、勝手にそう思っただけです」

米團治さんが音楽関係の仕事を多くするようになったのは「桂米朝の息子」というイメージから脱却したかったために、父とは別のジャンルを開拓し、自分の色を出そうとしてのことだろう。考えてみると、米團治さん得意の『七段目』などの芝居噺も、ほとんど米朝師匠は手がけていない。

「まあ、枝雀兄さんが英語落語を十年間もやっておられたのと近いでしょうか。みんな独

自の世界を切り開きたいんです。それでぼくはオペラを落語仕立てにするという誰もやらなかった『らくごペラ』というものに取り組んだわけなんです。モーツアルトが脚本家のダ・ボンテと組んだ『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『コシ・ファン・トゥツテ』などは、オペラ・ブツファですから、笑いの要素が非常に多いですよ。これは落語になるなあ、と思いました」

私は残念ながらまだその「らくごペラ」を聴いていないが、いつか聴いた米團治さんの『掛け取り』の中に、クラシック好きの借金取りが出てきて、みごとに言いわけで追い払われるところがとっても面白かった。それはこんなふう。

「アレグロオの金はいたいしたことないと思うたんやけど、ショパンの事情が重なってなあ、あつチャイコフスキー、こつチャイコフスキーしてるうちに、今年も今日でクレツシエンド」
(つづく)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月

を求めて

前田和男

第十五回

異教のよきライバル
賀川豊彦 その2



禁酒運動で「接近遭遇」

関東大震災での渡辺海旭との「接近遭遇」をひとしきり回顧したところで、賀川豊彦は、そうだ、それ以前にもう一つあったと頭の中で「記憶のずれ」を正した。年をとると時間があいまいになっていけない。ラジオドラマでは、それとは無縁の、海旭が媒酌した教え子たちが百組を超えたという「師弟交流のエピソード」が語られていて、いっそう賀川を「もうひとつの接近遭遇」の回想へと向かわせた。

あれがもつとも盛り上がりをもせたのは、大震災よりも数年前からだった、海旭にはずいぶんと刺戟をうけたと、賀川はつぶやきながら、書棚を目で追った。やがて禁酒運動関係の書籍がまとめられた一画を探しあてると、「あった、あった」と叫んで、黄ばんだ小冊子を手にとった。渡辺海旭著「仏教の排酒の制條」と簡素な太字で印字されただけの無愛想な表紙をまじまじと見つめると、賀川は往

時の記憶をたぐった。

賀川が生まれた当時の日本は、飲酒は江戸時代そのままの野放し状態だった。禁酒運動に最初に取り組んだのは、明治維新で「禁」を解かれたキリスト教だったが、入信すれば禁酒・断酒ができると誘う利用主義もあって、国民運動としてはなかなか盛り上がりなかつた。それが賀川が宗教家として活動をはじめた明治四十年代からにわかに活性化する。

その歴史的背景のひとつには、時の政府が日露戦争に向けた戦費調達のために酒税の大幅増に踏み切ったことがあった。そのため酒は値上がりし、消費量は減少して、かえって税収減となり所期の目的は果たせない。そこで政府はそれまで自由だった自家用酒（どぶろく）を禁止して消費量の拡大策にでた。これによって庶民は、酒を密造するか、メタノール入りの「悪酒」を買うか、あるいは高額の酒を買って家計を窮乏させるかの、いずれをとっても有難くない「三択」をせまられ、不健康と貧困の悪循環におちいった。こうし

て禁酒が社会問題としてクロースアップされることになるのである。

もうひとつ禁酒運動を活性化させたのは、未成年者の飲酒を禁止しようという運動目標を掲げ、仏教徒らも加わった超宗派・超党派の禁酒運動が「国民禁酒同盟」としてまとまりをみせたことだった。その仏教陣営の論客のひとりが渡辺海旭だった。

宗教家を超えた 社会事業家として

賀川は、手にとった海旭の小冊子「仏教の排酒の制條」を繰った。海旭が自らの宗派の自戒から出発していること、そして他宗、とりわけキリスト教に対する寛容な評価に、往時と同じようにあらためて共感をおぼえた。海旭はこう述べる。

「人倫を教え道義を明かにする世界宗教が排酒をいうのは当然である。キリスト教の禁酒なることは云うを俟たない。旧教（カソリック）の方では実質上酒を飲んでゐるが、然し

これはキリスト教本体ではない。旧教でもえらい人は飲まない。仏教の坊さんが酒を飲むのと同様で、教が悪いのではない、歴史が悪いのみである」

その上で、仏教では歴史的にも經典的にも禁酒であるとして、こう高らかに宣言する。

「かかる厳しい教のもとにある仏教徒が、禁酒を守るのは当然のことではなければならない。少なくとも、仏教の聖日を酒無しとして守り、仏事を無酒とする位のことには、全大衆と共に実行するところとならなければならない」

しかし、賀川が海旭を「良きライバル」だともっとも感じ入ったのは、海旭が禁酒を社会運動と捉えていることだった。いわく、

「社会問題の解決策には、或いは社会組織の改革に依るべきものであらう。然し、最も手短かで最も簡単で、最も容易なる解決の一方は禁酒である。例せば、少年保護の問題にしても、母性保護の問題にしても、酒を存して置いては問題ではない。不良少年を作って置いて保護するよりも、要はその原因に遡っ

て酒を絶やし、不良児を絶滅する途に出ねばならない。乳幼児死亡率の問題も、排酒によってこそ初めてその禍根を除くことができる。」さらに論をすすめて、こうもいう「国際的に我が国力の振興を計るにも酒をやめるのが先決問題となる。政治の腐敗を革新する途も、排酒に出発する。排酒こそは国難打開の秘鍵である」。

キリスト教団でもそうだが、禁酒を倫理の問題、教義上のタブーとしてのみ捉える「禁酒主義者」が多い。しかし、海旭は宗教上の倫理を踏まえた上で、「禁酒」は社会的課題と位置づけ、改善のための社会活動を提案し実践する。それは前述の海旭が深川で展開した救貧活動「浄土宗労働共済会」と通底するものであり、「宗教家というよりも社会事業家」の賀川のスタンスとも通じるものだった。

全国各地を禁酒演説行脚

賀川が繰り終えた小冊子の巻末には「長野県禁酒連合会主催の禁酒問題講習会での講

演」と記されていた。そういえば賀川も、海旭と同じ時期に講演をたのまれては全国各地を行脚したものだ。一番思い出深いのは京都での講演だった。たしか海旭と同様に冊子にまとめてもらったものがあつたはずだ、と書棚の禁酒コーナーをさぐって見つけた。背表紙に賀川豊彦著「精神文明とアルコホーリズム」とある。賀川は手に取ると、懐かしそうにばらばらと繰った。すると往時の熱狂がよみがえってきた。

大正九年四月、ところは京都市公会堂の「禁酒大講演会」。京都は禁酒運動の全国最大の拠点のひとつだったが、キリスト教よりも浄土真宗大谷本願寺派の影響力が強かった。そこへキリスト者の賀川が呼んでもらえたというのも禁酒運動の広がりや寛容さを示していたし、それゆえ賀川も自ずと演説に気合が入った。賀川の頭の中に、あの日の演説がまざまざとよみがえった。こんな名調子だった。「国を滅ぼすには二つの方法がある」と切り出し、「一つは戦争。もうひとつが酒だ」と

畳み込んで、聴衆を一気にひきつけると、「酒を飲むには三つの心理がある。第一は酒というものが興奮をする、第二には酒が魔酔の力をもっている、第三には疲労を忘れさせる」と論を進め、こう断じた。「労働階級に於て興奮なり、忘却なり、或は魔酔作用なりというものを要求するという、その社会的変態なる状態そのものを根底的に解決したいのであります。この三つの作用というものを根底的に解決さすには、ただ私共が禁酒を叫ぶのみならず、そこに社会改造の何か根本問題があるうと思っております」

「禁酒」は宗教倫理を超えた社会運動課題であるという点で、先の渡辺海旭の立論と同じだった。そして賀川は、こう結んだのだった。「今や新しき文明が甦りつつある。酒の刺激によらざる新しき文明へ、諸君達は揮って走り加わるべきである。私は兵庫県に住んでおりますけれども、日本の国の酒の三分の一は兵庫県で造られるのであるからして、私の町と私の県はかなり遅れるだろうけれども、こ

の立派な京都府の如きは先ず第一に禁酒府となり、禁酒市となることと思うのであります」満席の会場から拍手が沸き起こった。あの熱気はすごかった。労働組合や農民争議でもずいぶんとアジテーションをしたが、われながら思い出ぶかい演説だった。

今では考えられないことだが、禁酒は貧困と不健康を生み社会を不安定にするという問題意識が国民の間に醸成・共有されつつあった。だから、当時の賀川は全国行脚をするほどに運動が盛り上がっていくのを、肌でひしひしと感じたものだった。

海旭の急逝で

禁酒運動も足踏み

こうした宗派を超えた国民運動の高まりを受けて、大正十一年（一九二二）、ようやく未成年飲酒禁止法が成立する。禁酒同盟の副会長をつとめるキリスト者で衆議院議員の根本正が中心になって十年にわたって「提案しては否決」のくりかえしを末に勝ち取ったも

のだった。

それではずみがついた禁酒運動は、さらに「飲酒禁止年齢を二五歳以下に引き上げる改正法案」を提出するなど攻勢にうつてでる。そのなかで、昭和四年、渡辺海旭は禁酒同盟の理事に就任、このあたりから活躍が目につくようになり、賀川も一目も二目もおくようになった。一見、地道で生真面目が法衣を着ているように見えるが、海旭は大した企画力の持ち主だと賀川は感心させられた。そうそう、あれは昭和五年の初頭だった。

禁酒同盟は、来る総選挙にむけ、混迷をふかめる国会を浄化するには「議会の禁酒から」と、各地方の三千余の支部・支会の「全同志」三万人を動員、立候補予定者に「飲酒年齢の二五歳引き上げ」への賛否を問い、これに与しない「上戸候補」の落選運動を展開したのである。しかし、この作戦もむなく多くの「上戸議員」が当選すると、すかさず海旭や賀川らの提案に賛同して当選した長尾半平ら新人議員を神輿にかついで、各政党幹部、貴

族院・衆議院正副議長らを歴訪して、「酒なき議會」をつくるための運動をおこし、これまた大いに新聞をにぎわした。（結果はこれも空振りに終わり、改正案は否決されて日の目を見なかった）

当時の議員ときたら、まったく度し難かった。やれ大物政治家ほど酒を好む、やれ酒あつてこそ議論がなめらかになる、やれ昔は一日一斗のこもかぶりを八十日の会期中で八十斗飲み干したものだ、それにくらべると昨今は国会は酒量もへつて議論も小ぶりになったなどと愚にもつかぬ戯言を並べ立てる陣笠がばかりだから、政友・民政の政党内抗争にあけくれ、汚職をくりかえし、庶民からそっぽを向かれ、そこへ軍部が介入、ついに政党政治は崩壊し民主主義の芽はつまれて不幸な戦争へと突入していったのではないか。たかが「禁酒」というなかれ、賀川や海旭らの禁酒運動は、政党政治の終焉を占うリトマス試験紙だったかもしれない。

忘れもしない、それから三年後の昭和八年、松の内が明けるか明けなかつた。賀川と同じキリスト者で禁酒運動のまとめ役の根本正が死去。それから旬日をおかずに渡辺海旭が急逝した。

ちょうど、ドラマは流行り病を得た海旭が「いまわの際」にある大団円を迎えていた。仏教学の泰斗、高楠順次郎とともに十年をかけて漢訳仏典のアーカイブス「大正新修大蔵経」全八五巻を完成、本来なら海旭も同席するはずだった記念式典からとって返した高楠博士に看取られての往生だった。日本宗教界にとつてはあまりにも早くあまりにも大きな損失だった。

この根本と海旭の死によつて禁酒運動も少し立ち止まった感があつた。それに戦局の悪化が追い討ちをかけた。根本と海旭の死後数年で、禁酒運動は「欲しがりません勝つまでは」の耐乏生活運動に吸収されていく。賀川は最後の和平工作のために渡米するが果たせず、日本は戦争に突入。戦時には「敵性国

民」だった賀川は、終戦によつて一転して「知米派」の希望の星として東久瀨内閣の参与に就任。戦後四年の昭和二十四年（一九四九）、活動を再開した禁酒同盟の顧問に就いた。

社会的インパクトを 失った禁酒運動

賀川はラジオドラマを聴き終えると、「あの時の熱気」をなつかしく噛みしめながら、つぶやいた。「時代は変わった」。往時は「禁酒」は「魔娼」と並んで社会運動の中心にあり、そのまた中心に賀川と海旭はいた。しかし、いまや禁酒運動は社会的インパクトを失いつつあつた。賀川たちが目標にした「禁酒国家」というアメリカの社会実験は失敗。そのアメリカの占領下に今日本はある。これからは「国民皆禁酒」から「個人の断酒啓発」が中心になるだろう。激動する戦後日本では禁酒運動よりも優先順位の高い課題が山積、賀川自身も時代の要求に敏感に反応して、キリスト教、生協、労働組合の再建など、戦後

日本社会の復興に大車輪で取り組んでいた。その超多忙ぶりは、海旭と接近遭遇した関東大震災時と匹敵、いやそれ以上だった。ふと賀川は、海旭が生きていたらどんな活動をしているだろうかと思った。

と、再建された禁酒同盟の顧問に、賀川とともに名を連ねた椎尾弁匡から、会合の席で「渡辺海旭が生きておったら、賀川先生と同じように、大忙しで、禁酒同盟どころじゃないだろう」と言われたことを思い出した。椎尾は増上寺法主で、宗門では渡辺海旭の四歳後輩、海旭の妹を同窓の宗門エリートと争ったエピソードをもち、海旭とはじつこの間柄だった。そして、椎尾からは、仏教版救貧セツルメントである労働共済会やら、カルピスの命名やら、震災時の臨時郵便局の開局やらのエピソードを聞かされた。労働共済会については磯村から聞かされて知っていたが、それ以外は初耳だった。「カルピス」は賀川が企画開発した庶民向け万能服「賀川服」に、「臨時郵便局」は賀川が貧者向けに立ち上げ

た低金利金融機関とコンセプトが似通っていた。

椎尾がいうようにいま賀川は大忙しで、前述の多様な社会活動に加え、一億総懺悔運動、世界伝道、世界連邦運動などやりたいことが山ほどあつて時間がいくらあつても足りなかった。仏教でいえば「えにし」というのだから、人は死んでからもつながるものらしい。存命中は接近遭遇をしながら、結局は親しく交流することができなかった、海旭が生きていたら、またいいライバルになれたのにと、残念でならない。

そうだ、今日の説教は、禁酒を導きの糸にして「時代と社会と共に生きる信仰」について語ろう。そう内心でつぶやいて、今一度海旭の小冊子をいと惜しげに手のひらで撫でると、自らの冊子と「対」にして、そっと書棚にもどした。

(この項おわり)

仏ののたもう御言みことばは一言いちごんもあやまたずと申し候えおんそらごとば、ただあお
ぎて信おんずべきにて候。これをうたがわば、仏の御虚言おんそらごとと申すにも
なりぬべく、かえりてはまたその罪に候いぬべしとこそおぼえ候
え。

(法然上人『正如房へつかはす御文』)

仏さまのおつしやることには一言いちごんの誤りもないのですから、ただ素直に仰おんぎ信おん
ずるべきです。それを疑うようなことがあれば、仏さまのおつしやることは虚言そらごと
だということにもなりかねず、それではかえって罪を犯してしまうことになると思
われます。

仏の御言みことばと凡夫ほんぶの言葉——天あまの邪鬼じゃくではいられない？——

学生を引率して大きなお寺を参拝すると、必ずといっていいほど質問されることがあります。

「東西南北の四方を取り囲んでにらみをきかせ、仏さまの教えを外敵から守っている四天王してんのうの足下に踏みつけられている鬼は何というんですか？」

「あ、あれは天の邪鬼あまじやくだよ」

「えー！ あれがあ有名な天の邪鬼なんですか？」

「そうなんだよ。実はね……」

相手が「白」といえば、あえて「黒」というように、わざわざ他人に逆らう、へそ曲がり者のことを天の邪鬼といいますね。もともと天の邪鬼は、『古事記』や『日本書紀』に出てくる天探女あまのさぐめに由来する悪い鬼の名前からきています。その後、瓜子姫うりこひめなど、昔話にもしばしば登場するようになりました。たいていは、へそ曲がり、人の心を見すかしたり、人まねをしては悪さをしでかし、最後には退治されてしまう役回りです。

仏教においては、四天王の一人、毘沙門天びしゃもんてんの鎧よろいの腹部にある鬼の面が、中国の水の鬼・海若かいじやくと考えられ、それが「あまのじやく」と訓読され、次第に日本古来の天の邪鬼と同化されていったのです。

多くの方々と接していると、世の中の物事をはすに見ては、人の助言に耳を傾けることもなく、なかなか素直になれない方がいるのに気づきます。

そんな中、おや、もしかすると私自身も天の邪鬼なのかも知れない？ 最近の報道を耳にするにつけ、政治家の言葉を素直に信じられない自分自身に対し、こうした思いがふと脳裏をよぎりました。

「秘書にすべて任せて、まったく知らなかった」。亡くなられた方の名前を無断で使用した虚偽の記載。毎月一五〇〇万円、五年間で九億円にも上る実の母親からの資金提供。こうした一連の政治資金の流れをめぐる総理の言葉です。

一方、政権与党幹事長の資金管理団体が、都心一等地の土地購入の原資四億円を収支報告書に記載していなかった問題をめぐり、三人の秘書が政治資金規制法違反により起訴されながらも、政治家本人の口からは秘書への直接的指示が得られなかったということです。

もちろん、このお二人の言葉だけではありません。これまで、多くの政治家の言葉に「本当にそうなのか？」とたびたび疑いの心を差し挟んでいる、素直でない私がいたのです。とはいえ、こうした疑り深い心はなかなか直せそうもありません。これでは、四天王の足下に踏みつけられる天の邪鬼さながら

です。はたして、こんな私で大丈夫なのでしょうか？ よく考えてみると、その回答も、法然上人の冒頭のご法語の中にありました。つまり、すべての人は、疑り深い心、むさぼりやいかりの心、ねたみ心やそねみ心など、一連の弱い心をすべて断ち尽くすことなどできない他ならぬ凡夫であり、ある意味、お互いさまなのです。もちろん、そのままでもいいと言っているわけではありません。私たちは、そうした弱い心を少しでも減らし、人の言葉に素直に耳を傾けられる誠実さと正しい言葉を発する努力が必要であり、とりわけ、国民の負託を受けた政治家がその言葉に重みを求められるのは当然と言えましょう。

その一方、私たちは、阿弥陀さまの前では疑り深い心のままではいられません。否、そもそも阿弥陀さまが、すべての人の心に疑り深い心が潜んでいることなどお見通しであることを知れば、その阿弥陀さまの前では、自ずと素直な気持ちになっていく自分自身がいることに気づかされるのです。悟りを開かれた阿弥陀さまと迷いの心を断ち尽くせない私たち、仏の御言みことばと凡夫の言葉、この両者の根本的な相違に気づけば、あの天の邪鬼のように四天王の足下に踏みつけられることはなさそうです。合掌

(林田康順)

連載再開

法然上人を
めぐる人々

熊谷直実

の
回心

◆ 第二回 ◆

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

四

「遠慮せんで、もつと中にお入り」通はそういうと満をあらためて眺めた。

美しい娘だと思った。(もしかしたら、ほんまに平家ゆかりの姫やったんやろか)と思ひながら

「満とやら、あんた、東市で働いとったそやな」

「はい」

「法蓮房さまにも話が通じとるゆうから言うとかねんけど、ここは墨売りの婆さん所とは違うで」

「はい」

「どういう所か知っとるか」

「法然房さまの所で働かせて頂くのだと婆さまから言われてまいりました」

「あんたな、法然房さま、法然房さまち、気安う言いなさるけどな。ここは一昨年まで摂政関白をなされていた九条兼実公かて法然さ

まには師事していなさる所なんや。墨売りの婆さん所と一緒にいたにして貰うたら困りますがな」蓮がいった。

「……」

「あんたが思い出すかも知れへんからいうんやけどな」蓮は急に声をひそめて、

「今は源氏のご時世や。平家のことは道では怖うて話せへん。そこで此処だけの話やけど、ご一門が榮えていなさった頃は平重盛公かて法然さまのみ教えに帰依してなさったち聞いてますわ。平家の他のお方々かて同じやった言いますで。なあ、そやないか、お通さん」
蓮は通に同意を求めた。

「そうやったなあ」と通は満に話しかけるように、

「今は大きな声では言えんようになってしまふたけど、ここの法蓮房さまは平家にゆかりのあるお方だな。平家が榮えていなさった頃はご一門の方々も法然さまにみ教えをお聞きであつたち聞いとります。あんたは覚えとら

石丸晶子

昭和十一年三月



んやろけど、一の谷で捕われなさった平重衡様も、鎌倉に送られる前、たつての願いで法然さまに懺悔なされたという話や」

こんなことを話したら切がない、過去十年、何とも恐ろしい世の中であつた、とためいきをついて通は満をみつめた。

法蓮房さまは平家ゆかりのあるお方、と今通が言つたのは、平時忠の後妻領子（りやうし）が法蓮房信空の叔母であるからなのであつた。信空の父藤原行隆と領子とは互いの母を異にするものの父親を同じくしていた。同じくする父親というのは藤原顕時（けんとき）である。そしてこの領子の母というのは平忠盛の娘であつた。

系図がいささか複雑になつてくるが、ここで清盛が平忠盛の息子であることを思い出すことにしよう。するとどういふことになるかと言へば、信空の叔母の領子の母は清盛の腹違いの妹になるから、領子は清盛の姪なのである。

五

平家の血筋に生まれ、平家に嫁したそんな領子は、保元・平治の乱の勝者となつて平家が全盛の世を迎えると、いち早く宮中に出仕。やがて建礼門院に仕え、安徳天皇の乳母にもなつて、夫時忠とともに権勢を振るつていた。時忠は「平家にあらずんば人にあらず」と豪語したことで知られる清盛の義弟である。そして歴史が伝えるところによれば、清盛の妻・二位の尼時子が平家ナンバー1の女性ならば、この領子はたいへんなやり手でナンバー12の女性であつたという。

信空はこうして、父方の叔母領子によつて平家の中枢とつながつていたのである。

法然上人が山を降りられた承安5年（1175）の頃、世はまさに平家繁盛の時代であつた。平家を通さずには何事も前に進まぬ時代であり、やり手で勝気な女性であつたと伝えられる領子が羽振りを利かせていた時代で

あった。伝記は法然様が早くから皇室の方々にも浄土のみ教えをお述べになったことを伝えていたが、これはひとえに、信空が平家と、そしてこの平家を通じて皇室や公卿社会と、太い繋がりを持っていたことによると考えられる。

このことによつて、つまり法然上人―法蓮房信空―領子―平家一門―皇室関係・貴族社会という一連のつながりによつて、専修念仏のみ教えはまずもつて平家一門の間に、そして建礼門院など平家一門につながる皇室関係者に、広がっていった。今をときめく平家と太いパイプを持っている信空が、山を降りられた師法然上人のみ教えについて何の取次ぎも一門の人々にしなかったと考えるのは、むしろ不自然である。

ちなみに、未だ平家が繁盛していた養和元年（1181）に死去した藤原邦綱は清盛の片腕として活躍した公家であるが、彼の死の枕辺の善知識は史料によると信空か法然上人

であった。そしてこれに関しては法然上人の可能性のほうが高いという。

彼がなぜ、死の枕辺に叡山などの高僧を呼ばずに法然上人を招いたかと考えるとき、ここに浮上してくるのが平家との深い繋がりである。

彼の息子の一人は清盛の猶子であった。また平重衡の妻で、領子とともに安徳天皇の乳母の一人として歴史に名高い大納言典侍輔子（だいなごんのすけすけ）という女性（女性）は、邦綱の娘である。また他の娘邦子は、清盛の娘建礼門院の乳母でもあった。さらに、彼の邸宅は皇居にも用いられていたのである。

つまり、史料によつて法然上人が善知識であつたろうと考えられる邦綱は、平家や皇室関係の人々ときわめて近いところにいたのである。

西海に落ちた一門の人々が念仏を称えつつ討ち死にし、重衡が他の誰にでもなく法然上人に懺悔することを願つたと平家物語が伝え

ていることに對しては、しばしば、これは平家物語の作者の創作であらうというようにもいわれてきた。

しかし、常に法然上人の側にいた信空上人と平家とのつながりを思うとき、平家がいまだ繁栄していた日々、彼らが、そして皇室関係の人々が、山を降りられた法然上人から、信空や領子を介して浄土のみ教えを直接聞くことはあったにちがいないと思う。戦場で念仏しつつ死んでいく平家の人々のまぶたに浮かんでいたのは、法然様のみ姿であり、その専修念仏のみ教えであつたと私は思うのである。

歴史の話をしたついでに、もう一つ付け足すことにしよう。現在、膨大な叙事文学平家物語の成立に深くかかわつたとして注目される人物に、藤原行長と藤原時長がいる。

そしてこの行長は信空の兄であり、時長は信空の従弟である。信空の周りには、領子を結節点にして平家と深くかわり、その興亡



を身近に見つめてきた人物がいたのである。

六

「ほんまどすなあ」と蓮は顎でつと後ろの山を指しながら、

「今、鷺尾わしおにおいで在建礼門院さまかてひたすら法然さまのみ教えに縋すがってお出でやいますわ」

清盛の娘である建礼門院は壇ノ浦から生還後、洛北寂光院で一門の菩提を弔う念仏一途の日々を送っていたが、先頃、妹婿の藤原隆房の鷺尾の別邸に移っていた。洛北大原の地は京都市中からは離れていて淋しく遠く、建礼門院の身内の貴族たちが見舞いに訪れるにも余りに不便であった。そこで徳子とくこ（建礼門院）は周囲から勧められるままに、人里離れた寂光院を離れ、このとき東山の鷺尾に移っていたのである。

「叡山でもな。近ごろはお山を下りて法然さまのみ教えを聴聞しておられるお方もあるん

や」蓮は続けた。通は、

「源氏のお方かて、お侍を止めて出家してしもうた方もおるんよ。ここの道遍さんも道蓮さんもそうや。元は源氏のお侍であつたそやがな。壇ノ浦で平家を海に沈めて都に戻つて来なさつた後、もう関東には帰りたくない、このまま都に留まつて法然様のお側にいたいゆうてな」

「そうでありましたなあ」

「末法の世の無常を感じられたんやろ」

「はい」それまで通と蓮のことばを黙って聞いていた満が答えた。

「末法の世や、法然さまやないと、わてら誰かて救われまへん」そうきつぱりと通はいうと、

「わても蓮も、源平のあの戦で親も家も失うてな。賀茂の河原で寝起きしとる時にこの尼あまご御前さまに声を掛けられたんや。そんで吉水のお台所で働かしてもらふことになったんやけど、ここにおるとな、法然さまのお姿ば

毎日でも仰ぎ見ることもできる、み教えを聞くこともできます、こないな有り難いことはあらしまへん。法然さまがお出でのこのあたり全体がそろも仏恩で安らいどりますわな。この坂上つて来た時、あんたも氣いついたやろ」

「はい。大勢のお人が、何やいそいそと坂を上って行つてはりました」満が答えた。

「そうやろ。みんな、早よ早よ法然様にお会いしたいゆう気持ちでこの坂を上つて来はるんや」通の代わりに蓮が言った。

「そやけどなあ」と通はため息をついて、
「賀茂の河原に寝起きしとる時に見聞きしたこつは、そろも修羅畜生の地獄やつた。末法の世やつた」

甦つてきた過去に通はしばらく顔を歪めて遠くを見つめる目をしていたが、ふと現実に引き戻された様子で、

「つまりはやな。わてが言いたいののは、ここは東市の婆さまの店に仕えるような所とは違

ういうことや。そら町の衆かて仰山聴聞おやさんに来てますわ。そやけど、ほんまやったらわてらがお顔を拝めん身分の高いお方々が、法然様の御徳を慕うて吉水の坂を上つてこられる所やいうことを知つといて欲し思います。わてらそのお台所を尼御前あまごぜさまや道遍さん、道蓮さん、そして阿波の介と一緒に預うとるいうことを忘れんで欲しいんや」

といった。

通と蓮が、末世で見聞きしてきた事やら、法然上人の許で働ける自慢やら、こもこも満に今後の心得を言い聞かせて最後に

「行儀ようして貰わんとな」

と結論を出したとき、弥太が阿波の介とともに

「えらいこつちゃ。えらいこつちゃ」

といいながら台所に駆け込んできた。

(つづく)

NHK『こころの時代』を終え、いま

講師 **町田宗鳳**

法然上人
に思う

広島大学大学院総合科学研究所教授

1950年京都市生まれ。

幼少のおり、キリスト教会に通う時期もあったが、ふとしたことから14歳で出家。以来20年間、京都の臨済宗大徳寺で修行。34歳のとき寺を離れ、渡米。

のちハーバード大学神学部で神学修士号およびペンシルバニア大学東洋学部で博士号を得る。

プリンストン大学東洋学部助教授（90-98）、国立シンガポール大学日本研究学科准教授（98-00）、東京外国語大学教授（01-06）を経て、現在は広島大学大学院総合科学研究科教授、国際教養大学客員教授、広島大学環境平和学プロジェクト研究センター所長、平和科学研究所兼任研究員、平和希求委員会委員、オスロ国際平和研究所客員研究員（ノルウェー）、日本宗教学会評議員。研究分野は比較宗教学、比較文明論、生命倫理学。東京大学、名古屋大学、東京医科歯科大学、国連大学、聖心女子大学などでも教えた。

東京・名古屋・京都・岡山・福山・広島で座談会「風の集い」および「健康断食」を定期的に開催している。

会場 **増上寺三縁ホール**

6月25日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演(3:30終了予定)

会費 **1,000円**

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など、
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●別

〔特選〕別れ霜犬連れ歩く一人者

山口 信子

この頃犬や猫を飼う家が増えている。運動のために、毎日時間を決めて散歩に出る。この句の一人者は作者自身のことだろう。生活のすべてが一人と一匹である。早朝の別れ霜を踏む音が聞こえる。

〔佳作〕差別なき浄土の世界御忌の寺

佐藤 雅子

甲高い別離の歌や花の雨

雨宮 敦子

別荘の料理は土産の目張かな

石原 新

●岸

〔特選〕花屑に濡れて岸边の三輪車

仁科 雄一

三輪車で来た子供が、遊んでいるうちに乗って来たことなど忘れてしまったのだろう。歩いて帰ってしまった。夜の雨に花が散つ

て、三輪車にも落花が貼りついていて。いろいろのことを思わせる句である。

〈佳作〉

一本の花影揺るる岸辺かな

河合富美枝

対岸の宿へと消えて春日傘

岡田亜由美

対岸の釣り師日向に場所変えぬ

石原 新

●自由題

〈特選〉

幾重もの城の石垣つばめ飛ぶ

村上 青女

本丸から二の丸、三の丸等幾つかの石垣を巡らせたまま、廃城になっているのだらう。それらをたどりながら、一步一步天守跡に近づいていく。つばめがひるがえっていく。古城にはさまざまの夢がある。

〈佳作〉

散る桜崖暗ければ黄泉へ散る

内藤 隼人

灯台のともる早々や夕霞

斉藤 幸雄

花曇りピアノがひとり鳴り出しぬ

増田 信子

群舞自由題

兼題

季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■別

別格の新酒居並ぶ道の駅
春港別れ惜しむや利尻富士
母去りし億光年の別れかな
船尾より春の別れの手を振りぬ
花万染ハムスターとの別れかな
半島の花菜街道別荘地

■岸

彼岸太郎と出逢ふも縁や東山
海岸の波の泡舞ひ飛び散れり

締切・二〇一〇年六月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年八月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

この隅の墓も彼岸に入り給ふ
岸壁に船よこたわる春の海
線香を灯し手に持つ彼岸坂
岸壁の母を遠くに浅蜷掘る

■自由題

山巒に雪を残して月山湖
ほんのりと潮の香匂ふ夕桜
夕焼けし嶺霞みてや利尻富士
ゆふぐれは落花を掃きし庭簾
花あれば煙りのやうに人の来る
寝仏のごろごろ御座す花の下
老荘はかくあるべしや花口上
巻きたれば芯の出来たる花筵
花見客花見客へと犬渡る
花曇り爪のかからぬブルトップ
昼下がりが行く先々のいぬふぐり
ひと雨の畑のしめりや揚げ雲雀
トロ箱の魚の大口花曇り
一ぺんはお城に行こか花見ごろ

水野由佳
山口信子
斉藤幸雄
増田信子

佐藤雅子
河合富美枝
工藤浄真

斉田 仁
月島恭子
鳥羽 梓
山内桃児
工藤 掉
笠井亜子
小林苑を
鈴木真理子
寺下忠至
佐藤ゆう
浦田ちゑ

71

かい目

さっちゃんね

かまち♡おしろ



六月の摩文仁の沖に陽は昇る

岱潤

普天間問題で大揺れにもめた五月、この雑誌が出るころにはどうなっていることだろうか。この六月、沖繩は六十五回目の「沖繩の日」を迎える。

四月中旬、東京の人権同和委員会で沖繩を訪問した。今回は二十五年以上遺骨収集を行っている住職と一緒に、その現場視察が主な目的だった。戦後六十五年がたった今年でさえ、二月の作業で一七三柱の遺骨が収集されたそうだ。沖繩では戦後すぐに行われたご遺体の収集作業は町中に限られ、地元の人によって行われた二〇年代や三〇年代の遺骨収集で

は、転がっている遺骨が何万と収集された。そして組織された民間のボランティアが四九年から林や、山に入つての遺骨収集を行い、現在でも土に埋もれた遺骨は、まだまだ出てくる話だ。私たちが見せていただいた観光地のすぐ裏にある壕の入り口にも、バツテリーや注射針などが転がっていて、未だ沖繩の戦後が終わっていないことを生々しく感じた。

夜食事をした場所で、隣り合わせた沖繩の若い女性は、何年も前から毎年遺骨収集のボランティアをしていると、気取ることなく話された。その姿に本土の私達との意識の差、戦争の実態に対する認識の差を痛感した。平和を願う彼らの話

から、一体いつまで沖繩が軍隊に占領されていなくてはならないのか、延々と続く米軍基地や自衛隊基地を見つめながら考えてしまった。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤寛道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十六巻六月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年五月二十日

発行 平成二十二年六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇・八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

積善餘慶

積善の餘慶として
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

功德を積むとは、見返りを考えずに、
世のため人のために尽くすことである。

人との付き合いは二通りあります。一つは見返りを求めている付き合いです。商売がそうです。相手に笑顔を寄せ、代金を払って、売り買いします。この付き合いのお陰で、私たちは衣食住に心配せず暮らせます。

もう一つは、見返りを求めない付き合いです。お母さんが子供に振り向ける愛情。年とつたとき

に、世話してほしかったために、おむつを替えたり、勉強させる親はいません。

功德を積むことは、結果を期待していない点で母性愛に似ています。故人が何処にいるか、どうしているか、分からないことだらけです。しかし故人の幸せをひたすら願って、花や線香を持って墓参する営みは、誰にでもできる身近な功德です。

法然上人鑽仰会の

本

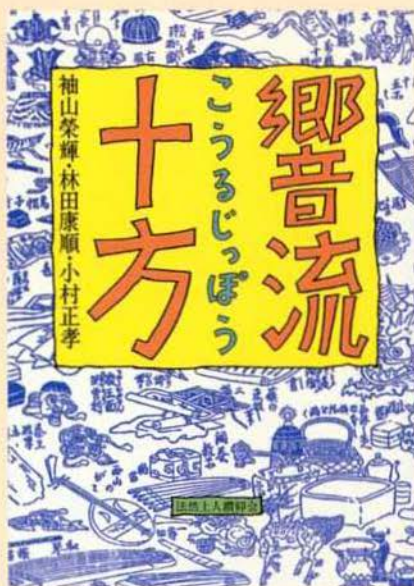
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円



巾額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



「浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より